イジコ（イチコ）

岡崎むかし館蔵

浅い円筒形のわら(藁)で作られたカゴで、農作業時に重宝された道具です。収穫した作物や牛馬のエサなど、様々なものを入れて持ち運ぶために利用されました。少し長めの持ち手となる縄紐は、肩にかける、背負う、天秤棒に提げるなどの使い方ができます。地域によっては呼称も異なり、「イチゴ」などとも言います。「こも編み台」という簡易な道具で、胴の部分を編み上げて作ります。

わらは稲から籾を取り去った茎の部分であり、米作りの副産物ですが、無駄にすることなく様々なものに加工されました。縄、むしろ、こも、俵、みの、ぞうり、手ぼうき、わら葺き屋根など、梱包材、敷物、日用品、建築資材、あらゆる用途に用いられ、特に農家のくらしに欠かせない存在でした。農閑期には、農家の人自らわら製品作りを行い、春からの農作業に備えました。

しかし、ナイロンやビニール製品などの登場により、自らわらを加工して道具を作り出す必要性が薄れ、さらには農作業の機械化によって、わらは粉砕処理され、確保するのもかえって難しくなっています。現在ではわらを使う機会が減り、わらを加工できる技術を継承している人も非常に少なくなりました。くらしの知恵が詰まった技術は、何とか残していきたいものです。

＜参考文献＞　『いまに伝える　農家のモノ・人の生活館』大舘勝治･宮本八惠子,柏書房、2004 年